

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

4 APRIL 2005

CONTENTS

クリスティーナ・ブランコ.....1、2
SELF PORTRAIT 高山三智子 ...2
最近の公演から3、4
ネタマ&プチ情報5
インフォメーション6



クリスティーナ・ブランコ

「ファドは人生を語ります。だからわたしはファドをうたうんです。」 4 / 23(土) クリスティーナ・ブランコ ポルトガルの心、ファドを歌う

「ファドには、ポルトガル人が外の世界で発見したものがすべて入っています。(中略)すべてがミックスして、ファドというひとつの形になったのです(談:クリスティーナ・ブランコ、以下引用同じ)」

ヨーロッパの西の果て、大西洋に向かって頭突き出したイベリア半島のいわば「顔」にあたる場所に、ポルトガルはあります。この国はその顔をいつも海に向け、潮風を感じながら、海の果てにある黄金郷(エル・ドラド)に思いを馳せていました。バスコ・ダ・ガマやエンリケ航海王子の大航海にも見られるように、彼らは思いを馳せるだけでなく、実際に大海原に旅立ってゆきました(彼らは、日本を最初に訪れた欧米人でもありました)。

ポルトガルのポピュラー・ミュージック、「ファド」は、海を旅するポルトガル人の心から生まれた音楽です。異国で出会った音楽(ブラジル、アラブ、アフリカなどの音楽)と、旅を通じて味わう人生の縮図のような喜怒哀楽とがまじりあい、港町リスボンに持ち帰られてワインのように熟成した音楽、それがファドなのです。編成はヴォーカル(なぜか女性歌手が多い)とギターラ(ポルトガル・ギター)によるアンサンブルが基本。スペインのフラメンコやアルゼンチンのタンゴ同様、人生の哀歓がぎゅぎゅ詰まった節回しが印象的ですが、はるかな故国への郷愁(サウダーデ)の感情が、激しさよりは憂いを帯びた優しい表情を与えています。そう、ファドとは、人生という旅路の儂さや美しさを、私たちにもう一度気づかせてくれる音楽にほかなりません。

「ファドは人生を語っている。都市生活を語っている。これは、どんな時代でも、とくに今日ではなおさら、重要なことです。一時的にファドは沈滞していたかもしれませんが、死んではない。必ず生命を取り戻すんです。新しい世代も歌うのは当然です。都市生活が発展するように、ファドも発展するんです」

さて、ファドといえば、アマリア・ロドリゲスの名が反射的に浮かんできます。アメリカならサラ・ヴォーン、日本なら美空ひばりにもたとえられるこの大歌手は、深い情感をその超絶的な歌唱力で歌い上げ、ファドの代名詞と化しました。あまりに偉大すぎて彼女の没後ファドに新しい展開はありうるのか、とも思われましたが、そこに登場した新星が、クリスティーナ・ブランコです。

彼女のアルバムを聴くと、先行する世代のファドのむせるように濃厚な情感とは違う、海辺で涼やかな潮風を胸いっぱい吸い込んでいるような気分になります。その印象をもたらす要因は、もちろん彼女のヴォーカルでしょう。音量や表情を激しく変化させるのではなく、ピロードの布がさまざまな角度からの光を受けて微妙にその光沢を変えてゆくような、繊細なヴォーカライゼーション。それは聴くものを圧倒するよりはむしろ優しく包みこみ、心の鎧の留め金を、ひとつひとつはずしてゆきます。裸形になった心は、まるで潮風を受けた頬のように、生気を取り戻してゆくのです。

情感をそのままぶつけるのではなくピロードの布にくるむ彼女のアプローチは、ファドの伝統に

対し一歩距離を置いた批評的な視点にもとづくものでしょう。ちらしに書いたプロフィールをもう一度ご覧ください。彼女は少女時代には心理学を学び、ジャーナリストの道を歩もうとしていた才媛で、特にファドに関心を持っていたというわけではなく、むしろジャズやボサ・ノヴァ、ブルースなどが好きな少女でした。それが18歳のときに祖父からもらったアマリア・ロドリゲスのレコードに衝撃を受け、「ジャーナリズムよりももっと強力なコミュニケーション」と確信し、シンガーへの道を選んだのです。伝統の呪縛に囚われることがなかったからこそ、ファドのヴォーカルの「型」から逃れ、かつファドをジャズ、ボサ・ノヴァ、ブルース、シャンソンなどのテイストを取り入れた新世紀のポピュラー・ミュージックに昇華させることができたのでしょう。

その過程で大きな役割を果たしたのが、盟友であるギターラのクシュトード・カシュテロです。この二人のコンビは、ブランコが詩を選び、カシュテロが作曲するという関係にあります。彼の存在の大きさは計り知れないものがあります。ブランコはファド歌手をめざしている頃、偶然ある店で彼が弾いているのを聴き、それがきっかけで「共犯関係」(ブランコの言)に陥ったそうですが、このふたりの出会いはいささか大仰ながら、ファドにおけるジョン・レノンとポール・マッカートニーとの出会いというべき運命的なものでした。深い文学的素養を持ったブランコは、ポルトガルの詩人たち(13世紀のガリストウ・フェルナンデスから現代のペドロ・オーメン・デ・メロまで)のみな



【クリスティーナ・ブランコのCD】*発売はすべてユニヴァーサルミュージックから。芸術館ミュージアムショップ「コントルポアン」で取り扱い中。写真左;『センスス～感じて...』(UCCS-1054)*『官能』をテーマに7世紀にわたる詩を取り上げた傑作。/写真右;『夢を追う人 詩人スラウエルホッフを歌う』(UCCS-1055)*ポルトガルにあこがれたオランダの詩人スラウエルホッフに焦点を当てた1枚。『ユリシーズ』(UCCS-1072)*3月25日に発売されたばかりの最新盤。この原稿を書いているのが発売前なのでまだレビューできないが、コンサートではこの新盤から多くの曲が演奏されるであろうことは確実。



高山三智子

らず、ポルトガルに魅せられたオランダの詩人スラウエルホッフ、ブラジルのボサ・ノヴァ詩人ヴィニシウス・ヂ・モライス(アントニオ・カルロス・ジョビンも旋律をつけている)同じくブラジルの偉大な音楽家/小説家シコ・ブアルキ、さらにはシェイクスピアまで、さまざまな詩人たちの名詩を選びます。そこにカシュテロはギターラ独特の金属弦の透明な響きを大切にしつつ、ブランコの求める多彩な音楽のこぼれを柔軟に取り入れた楽曲を創りあげてゆくのです。彼のギターラ、アレシャンドレ・シルヴァのギター、フェルナンド・マイアのベースによるアンサンブルは、まるで繊細な生糸で織られた布地のよう。どちらかが欠けたら成立しないほど深く結ばれた声と楽器とが、彼女たちの唯一無二の音楽世界を形作ります。

そして、ヨーロッパの聴衆は、そのような彼女たちのファドがポルトガルという国の地方性を超えた音楽であることに、すばやく気づきました。はじめオランダで、つづいてフランスでブレイクした彼女は、いまや90年代のマドレデウスにも匹敵するポルトガル音楽のスターとして欧米を席卷しています。日本にも昨年初来日し、草月ホール等で伝説

的な名コンサートをを行い、NHK『スタジオパークからこんにちは』にも出演したクリスティーナ・ブランコ。再来日となる今回の公演は、伝説が真実であることを確認する最高の機会となるに違いありません。東京でのクラブ公演、愛知万博への特別出演を除くと、その機会に出会えるのは、水戸芸術館だけです。

コンサートには歌と楽器のバランスを考慮してPAを入れますが、限りなくアコースティックなサウンドを目指します。また、歌われる曲目は直前まで決まらないので(もしかしたら前日まで?)、字幕や歌詞対訳をつけることは難しいのですが、決まらないうちに歌詞大意等の情報をそろえ、できる限り彼女の歌う詩の世界を楽しんでいただけるようにする予定です。とはいえポルトガル語の響きはそれ自体美しいものですし、彼女たちの麗しきパフォーマンスは、下を向いて詩の意味をなぞるひまなど与えてくれないかもしれませんので、「予習」されたい方のために彼女のアルバムを3枚上の欄に挙げました。そうそう、関連企画として4月9日にポルトガルの生んだ、現在世界最高の映画監督、マノエル・ド・オリヴェイラ監督の近作『永遠の語

らい』を上映するのもお見逃しなく(詳しくは「ネットマ」をご覧ください)。コンサートと映画のチケットを一緒に購入していただくと200円引きになります。

とにかく、ファドをまったく知らないという方にも、このコンサートは深い感銘を与えてくれるはずですよ。ブランコはインタビューで、日本の聴衆についてこう言っているのですから。《矢澤》「海に乗り出すポルトガル人は世界のいろいろな民族の感じかたを吸収してきましたが、そこには東洋的なものも含まれています。だから日本の人は、ファドを、特にアマリア(ロドリゲス)の歌を、こんなに理解し、愛してくれているのだと思います。ファドはただ悲しいだけの歌ではありません。そこにはメランコリーがあり、ノスタルジーがあり、サウダーデがある。そういう感情を、日本人たちはほんとうに理解し、感じてくれる」

*記事中のクリスティーナ・ブランコの発言は、北中正和氏、白石和良氏(月刊ラティーナ)、吉村喜彦氏(BE-PAL誌)によるインタビューから引用しました(提供:プランクトン)

SELF

PORTRAIT

プレトニョフとも同門、フリエールに学んだ水戸在住のピアニスト

4 / 26(火)

高山三智子

ピアノ・リサイタル

リサイタルの喜びのひとつは、曲決めにあると思います。何を弾くか、何を出し物にするかを考える時の楽しさは、デートに行く時のような、ワクワクとした期待と不安があります。「何を弾きたいか」と「1番目に何を出すか」によって、プログラムの雰囲気の変化してしまいます。本当は、今回シューマンを弾きたいと思っていましたが、シューマンを弾いたらベートーヴェンは出せない、となると、涙を吞んでシューマンを降ろして、ベートーヴェンの悲愴にしました。1曲目と最後に何を弾くかを決めて中間を決めていきます。この頃は、リサイタルの時に必ず、ベートーヴェンを弾きたいのです。最

初にモーツァルトのソナタというのも考えはするのですが、今は曲の配列を考えると、もっとドラマチックな、力強いものが自分の心にぴったりと合うのです。ドラマチックな音楽の続きはリストになりました。ショパンも弾きたい曲がいっぱいあるのに、リストの華やかさ、技巧的で目に見せる音楽が第2番目になりました。1曲目は美しさに感動し、その心の打ち震える思いを曲にしたもの。2曲目はハンガリー、ジプシー(ロマ)の色々な踊りを人生劇場のように歌い上げ、ドラマチックに仕上げられている作品です。

ところで、音楽会の曲目を作成する時、たびたび思い出すが、留学時のフリエール教授宅での出来事です。クラスメートが集まり、ある時「演奏は誰のものか」という事が話題になりました。プレトニョフは「芸術の為の芸術」と言い、大論争となりました。またある者は、演奏が聴衆のものであるという大事な面を無くしては演奏会の意味が無い、と喧々諤々、大騒ぎをしたことを昨日の事のように思い出します。フリエール教授はいつでも、プログラムは聴衆が楽しめるように色々変化しなければならぬ、とおっしゃっていましたが、若い頃は、自分に余裕がなく、自分本位でした。聴衆は、無

理矢理券を買われ、音楽会に行けば、全ての曲が、何もわからず、聞いたこともないものばかりで、分からない事を分かっている振りをしながら苦行に耐え、音楽会が終わって、ようやくその苦行から逃れられて「アアー良かった。」という具合です。一方、演奏家は、自分の演奏が「良かった」と勘違いをするのです。全く人生なんて、こんな誤解で成り立っているのかも。

という訳で、後半の最初は、エリーゼのためにやシューマンの トロイメライ、ショパンの 幻想即興曲 など、皆様の聴いた事のある曲を取り上げます。そして最後は、自分の音楽観を。今回のプログラムの主役であるラフマニノフ作品を取り上げます。

どの曲も私の大事な宝物。ピカピカに磨き上げ、より良い装いを施して、皆様のお出ましをお待ち申し上げております。200年以上も前の作品から、およそ60年前の作品までを一堂に会し、皆様のお耳に掛かる事になる一世の舞台に立つ日を、ドキドキとした思いとともに待っております。どうぞ皆様、どんな音楽が皆様に届くか、お出掛けになりませんか?もしかしたら、もしかしたら.....。

高山三智子

最近の公演から

JANUARY
FEBRUARY



1



2



3



4



5



6



7



8

ニュー・イヤー・コンサート2005(1月5日)
LOVE & PEACEをテーマにした今回のニュー・イヤー・コンサート。演奏会のチケットが発売された後に新潟中越地震、スマトラ島沖大地震などの大災害が立て続けに起こり、コンサートに込められた祈りはいっそう切実さと重みを増すことになりました。その重みを受け止める出演者の演奏は不安や悲しみを和らげ、明日への希望を力強く描こうとする意志に満ちていました。司会の長岡杏子さんも暖かい語り口で、出演者たちの熱演をしっかりと支えてくださいました。3時間半の大演奏会になってしまいましたが、カーテンコールの最後まで、満場のお客様が惜みない拍手を送っていたのは嬉しい限りです。なお当日演奏曲目については「プチ情報」をご覧ください。《矢澤》アンケートから 重箱にごちそうてんこ盛り! おなかいっぱいだけど、すごくいやされた。今年はいいい年になりそうな気がしました。(水戸市:E.H.さん) 自分のリクエスト曲が聴けて嬉しかったです。森さんの美声にうっとり(水戸市:M.A.さん) ビーバーの バッタリア や「低弦アンサンブル」など楽しめました。なかなか普段は聴けない演奏でした。「ニュー・イヤー・コンサート」は突破りがゆるされるので、どんどん実験的なことをやってほしい(水戸市:S.E.さん) (MCOに対して)新潟へはよく来てくれました。そして震災にあわれた人々を元気づけて下さり、ありがとうございました。(中略)あの演奏はいつまでも心に残ることと思います(新潟県佐渡市:M.B.さん) 祈りに満ちた素晴らしいコンサートでした。(中略)全世界の人々の平和をお祈り申し上げます。ありがとうございます!(無記名の方)

畑中良輔の 日本のうた セミナー 第4期(3)
(1月16日)

2001年に開講し、1年に3回ずつ開催してきた日本のうた セミナーの最終回。石桁真礼生、石渡日出夫、小林秀雄、越谷達之助、畑中良輔等、戦後に活躍した作曲家の名歌が研究曲として取り上げられました。講師自身の曲はもちろん、講師が以前バリトン歌手として盛んに歌ってきた曲が多く、レッスンにはいつも以上の熱が入り、4名の受講生はその指導に必死に食らいついていました。ミニコンサートにはゲスト歌手の瀬山詠子(ソプラノ)が出演。田中直子のピアノ伴奏で、小さい命 みぞれのする小さな町 など石桁真礼生の名歌を聴かせてくれました。さらに、最終回の特別プレゼントとして、講師が自らの歌曲 花林 を披露。1922年生まれの人々の声とは到底思えない艶のある美声と年輪のもたらす味わい深い歌唱に、すべての聴衆が感慨深く聴き入りました。最後になりましたが、この4年間、当セミナーを支え

てくださった皆様に心から感謝します。《関根》アンケートから 畑中先生のご指導は1つ1つの小さな話にもさすがに説得力があり、ゲスト歌手の演奏は深く心にしみました。受講の方々もそれぞれ熱心に精進されているのがうかがえて、大変興味深く、共感しつつ、毎回たのしく聞かせていただきました。(つくば市:M.N.さん) 4組の受講者の情熱、瀬山さんの麗しき貫禄、畑中先生の 花林。降りしきる冬の雨の中、本当に今日は来て良かったです。(東海村:Y.N.さん)

栗コーダーカルテットのファミリー・

ワークショップ『はじめのリコーダー』

(1月23日・30日・2月5日)

栗コーダーカルテット コンサート

(2月6日)

3週に渡っての栗コーダーカルテット(以下、栗Q)のワークショップとコンサート。今回のワークショップは『はじめのリコーダー』と題し、まだリコーダーをふいたことのない小学校1、2年生とその家族を対象に、コンサートで演奏するこのワークショップのために作られた作品を練習するほか、様々なリコーダーの紹介コーナーやミニコンサートなど、盛り沢山の内容で行われました。カードに描かれた図を見てそのイメージで音を出してみたり、栗Qとのアンサンブルを楽しんだり、真剣に取り組む親子の姿が微笑ましかったです。また、満席のコンサートに、栗Qも「こんなに沢山のお客様の前で演奏するのははじめて」とびっくり! オリジナル曲をはじめ約20曲が演奏され(セットリストはプチ情報をご覧ください)、時に栗Qの演奏にあわせて歌い出すお子さんがいたり、自然と笑顔になれる一時でした。このワークショップとコンサートで栗Qが伝えたかったこと、それは「楽譜が読めなくても上手く楽器が演奏できなくてもいい、『音楽は楽しい』ということ。最初のワークショップでは緊張していた参加者の表情が回を重ねるごとにやわらかくなっていき、コンサートでは1番いい顔で1番いい演奏をしていたこと、そして会場が終始笑顔に包まれていたことが本当に嬉しかったです。《馬場》アンケートから ほのぼのしていたりボケーっとした曲が、実はとても緻密に作曲されていて感動しました。演奏技術もすばらしい!(水戸市:N.K.さん) 『はじめのリコーダー』のがすごくおもしろかった。リコーダーのえんそうは、ピアノとかオーケストラとかとはぜんぜんちがくて、すごくかわいかったりするところがいっぱいあった(水戸市:M.M.さん 10歳) 子供達とのワークショップのすばらしい演奏はとても楽しめました。音楽記号ではなくオリジナルカードの工夫が小1、2年には分かりやすい。教え上手だと思いました。(つくば市:T.S.さん) と



1



2



3



4



5



6



7



8

てもこちよく、しあわせになれる演奏会でした。またぜひとも芸術館に来てもらいたいです。(ひたちなか市:I.K.さん)

現代音楽を楽しもう - XVIII
須川展也・サクソフォン(2月11日)

作曲家の池辺晋一郎企画の人気シリーズが「現代音楽を楽しもう」。その第18回となる今回は、クラシカル・サクソフォンの須川展也による演奏会であった。ピアノ演奏は須川といつも共演をしている小柳美奈子。また、池辺作品 軌道エレベーター には、カウンターテナーの猫殿が出演した。須川の演奏は、暴力的ともいえるエネルギーな作品から、瞑想的に謡われる作品まで、サクソフォンの表現の幅の広さを存分に伝えてくれた。演奏の合間には池辺と出演者とのトークも盛り込まれた。作曲家の西村朗氏も舞台上が上がってトークに参加した。池辺企画ならではの演出である。《中村》アンケートから サクソフォンの新たな魅力を知った。演目それぞれに、わくわく感と感動があった。(つくば市:H.S.さん)

風景のうかぶような曲が多く、満喫させていただきました。来年の「現代音楽を楽しもう」も楽しみにしています。(日立市:M.H.さん) すばらしい演奏に大きな感動をいただきました。小柳さんのピアノもすごかった。(ひたちなか市:S.さん) 浅き春の二月、現代音楽の世界にひとときひきずり込まれた。難解さという言葉は空に、海に捨てましょ。須川、小柳、本当に素敵なカップルですね。(那珂郡:Y.N.さん)

中学生のための芸術鑑賞会
(2月8、9、15日)

中学生にコンサートホールでクラシック音楽の演奏に触れていただくことと毎年開催している鑑賞会。水戸市立中学校全15校と茨城大学附属中学校および茨城中学校の1年生、およそ2,600人がホールを訪れた。出演者は当館専属楽団、ATMアンサンブル・水戸カルテットのメンバーの豊嶋泰嗣(ヴァイオリン、ヴィオラ)、川上徹(チェロ)、鈴木美奈子(ピアノ)。それぞれの楽器についてなどのトークを挟みながら、独奏曲からピアノ三重奏曲まで、ポピュラーな名作の数々を紹介した。また終演後、希望する生徒たちは、エントランスホールでパイプ・オルガンによるバッハの「小フーガト短調 BWV578」の演奏を鑑賞した。オルガン演奏は中川紫音。《中村》中学生のアンケートから 演奏会というのは、初めてだったので、少し緊張したけど、とても楽しかった。目の前で、音楽を聞いたのも初めてで、CDで聞くのと違って、迫力があって、びっくりした。クラシックはとても音がきれいで、聞いていて心地よかった。またこういう機会があったら、聞きたい。(第五中:E.O.さん) ヴァイオリンをあそこまで速

くひけることにびっくりした。チェロはゆったりとした音楽で、ほんとうに白鳥が泳いでいるかのような演奏だった(双葉台中:S.K.さん) すごく身近で聞けて良かった。ヴァイオリンやヴィオラ、チェロやピアノの歴史など、色んな事を教えてくれて、勉強になった。やはり上手になるためには、たくさん練習をしなければならないという事を学習できた。私も部活などに生かしていきたいと思う。(第三中:M.O.さん)

ちょっとお昼にクラシック 4
(2月15日)

上記「中学生のための芸術鑑賞会」と同じ出演者・内容で、平日の昼間にお楽しみいただくコンサートとして開催しているのが「ちょっとお昼にクラシック」シリーズ。ご来場くださるお客様の数は年ごとに多くなっており、今後もそのご期待に副える企画としていきたい。《中村》アンケートから すてきな演奏、楽しいトーク、出かけやすい時間帯、リーズナブルな料金、うれしいワンドリンク。毎年、この企画を楽しみにしております。(水戸市:K.G.さん) ヴィオラによる ヴォカリーズ、演奏が始まった途端に目頭が熱くなり、涙があふれてきました(水戸市:M.O.さん) 主婦にとって、洗濯ものが乾く間にこの様な演奏がきけて、本当に感激です。(水戸市の方) オーケストラのようなはなやかさはないけれど、人物、楽器ともそれぞれ存在感があり、近い距離での演奏会は息使いまで聞こえてとても良かったです。(水戸市:Y.T.さん)

武久源造 オルガン・リサイタル
(2月21日)

多くの時間を費やされて行なわれたリハーサルを終え、演奏会の前日の深夜に「ようやくこのオルガンとも仲良くなれたと思う」と武久源造は語った。その言葉を裏づけるように、エントランスホールに放たれたオルガンの響は、命を宿したかのごとく生き生きとしており、彼の多くのメッセージがそこに籠められているように感じられた。曲間には武久のとても親密で気さくなトークが挟まれた。《中村》アンケートから はじめてまとまったパイプ・オルガンによる演奏にふれ、音の荘厳さに感動しました。(水戸市:S.K.さん) ずっと眼を閉じて聴いていました。オルガンの普遍性を感じました。また、壮大な天井画を見る思いがしました。(水戸市:S.E.さん) 武久さん自身が各曲の演奏前にユーモアを交えて話された解説はとても面白く、オルガンと聴く人をコミュニケーションしたいという情熱を感じました。武久さん編曲のルーマニア民俗舞曲集は生氣のあるすばらしい演奏でした。(ひたちなか市:Y.K.さん)



*nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろいろなところへnettamaします。

旅する映画、『永遠の語らい』

クリスティーナ・ブランコのコンサートの関連
企画として、4月9日(土)にACM劇場でポ
ルトガルの映画監督マノエル・オリヴェイラの
『永遠の語らい』(2003年作)が上映される(N
PO法人シネマパンチとの共催)。ここ数年、『ラ
ッチョドローム』、『炎のジブシー・プラス』と、コ
ンサートに関連した映画上映を行っているがこ
れら2作は、いずれも演奏者たちが出演するも
のだった。しかし、今回の『永遠の語らい』はク
リスティーナ・ブランコも、ファドも登場しない。

ではなぜ関連企画なのかと言うと、ひとつに
はポルトガルという国の独自の文化を、ファドと
映画、ふたつの面から多角的に愉しんでいただ
きたい、という思いから。もうひとつは、ファドが
ポルトガル人の宿命ともいべき「旅」から生ま
れたように、この映画も「旅」をテーマにしてい
るからなんだ。

この映画の主人公はポルトガル人の歴史学
者の母と、その娘。インドのボンベイにいるパイ

ロットの父親に会いにゆく機会を利用し、ポルト
の港から豪華客船に乗って地中海と紅海をめぐ
りインド洋にむかう船旅に出る。それは単なる
物見遊山ではなく、地中海文明の遺跡を訪れ
ながら西欧の歴史をめぐる旅。イタリアの古代
都市ポンペイ、古代ギリシアの神都アテネ、東西
の接点イスタンブール、エジプトのピラミッド、ス
エズ運河…。ゆったりした歩みの中、地中海と
青い空に囲まれ画面いっぱいに広がるこうした
街や旧跡たちの映像がとにかく圧巻で、陶然と
見入ってしまう。その遺跡を見ながら、小さな娘
は母に、素朴な質問を次々投げかける。母はど
んな質問も受け止め、神話について、歴史につ
いて、戦争について優しく説いてゆく。母役のレ
オノール・シルヴェイラはオリヴェイラ映画の常連
ヒロインで、クリスティーナ・ブランコ同様エキゾ
チックな容姿が美しい。一方船内では、船長
(『シェルタリング・スカイ』『ザ・シークレット・サー
ビス』の名優ジョン・マルコヴィッチ)と彼の賓客
である3人の女性(カトリーヌ・ドヌーヴをはじめ

すごい顔ぶれ!)との間で、晚餐の度に女性と国
家をめぐる議論が交わされる。女性に歴史を託
してくれれば、こんなに戦争は起こらないでしょ
うに...と、あり得るべき未来について語る女性
たちに、船長もたじたじだ。

過去の歴史、そしてあり得べき未来、このふ
たつの「旅」について、美しすぎる映像で悠然と
映画を進めてゆくオリヴェイラ監督(このときな
んと95歳!)の手腕はもう桁違いのすばらしさ
で、現在世界最高の映画監督と言うことに何の
ためらいもない。しかし、「過去」と「未来」が出
会う接点に、オリヴェイラ監督はさらに驚くべき
クライマックスを用意した。それについてここ
に書くことはもちろん絶対にできないが、僕は
映画を観終わって茫然自失、しばらく安心して
いた。ここでは仏リベラシオン誌の次のような
批評を引用するとどめよう。「95歳でオリヴェ
イラは世界を認識する。もうこれ以上認識す
る必要がないほど。本作は、もはや衝撃である。」
旅するポルトガル人が、どのように「世界を認識
する」のか、4月9日15:00、ACM劇場にぜひ確
かめにおいでいただきたい。



プチ情報 速達

ニュー・イヤール・コンサート2005、ちょっとお昼にク
ラシック4、栗コダーカルテットの演奏曲
目をご紹介します。

【ニュー・イヤール・コンサート2005】

パッサ(マラー編曲):管弦楽組曲 第3番 二長調
WV1068から エア(指揮:堀伝)/モーツァルト:フル
ート四重奏曲 二長調 K.285(フルート:工藤重典)
/ブラームス:ホルン三重奏曲 変ホ長調 作品
40から 第3楽章 アダージョ・メスト(ホルン:水野信
行)/ラフマニノフ:14の歌曲 作品34から 第14
曲 ヴォカリーズ(チェロ:上村昇)/リスト:愛の夢
第3番 変イ長調 S.541&レノン(ジェフスキ編曲):
“自由を我等に”によるショート・ファンタジー(ピア
ノ:野平一郎)/パッサ(グノー編曲):アヴェ・マリア、
ヘンデル:歌劇 セルセ(クセルクセス)から“なつ
かしい木陰よ(オンブラ・マイ・フ)”&ヘンデル:歌劇
リナルド から“涙の流れるままに”(ソプラノ:森麻
季)/パッサ:平均律クラヴィア曲集 第2巻 第24
曲から 3声のプレリュード 短調 BWV893&カタ
ロニア民謡(カザルス編曲):鳥の歌(低弦アンサン
ブル)/ネスラー(タール編曲):組曲 ゼッキンゲンの
らっぱ手 から“主のご加護のあらんことを”(トラン
ペット:杉木峯夫)/ビーバー:パツタリア(戦争)/パ
ッサ:カンタービレ・マ・ウン・ボコ・アダージョ
BWV1019a(ヴァイオリン:久保陽子)/ガーシュウ
ィン(ハイフェッツ編曲):歌劇 ボーギーとベス から
“あの人は行ってしまった”“ベスよ、お前はおれの
もの”(ヴァイオリン:田中直子/クライスラー:ロンドン
デリーの歌(ヴァイオリン:加藤知子)/プッチーニ:
歌劇 ジャンニ・スキッキ から“私のいとしいお父
様”&ドニゼッティ:歌劇 シャモニーのリング から
“私の心の光”(ソプラノ:森麻季)/パーバー:弦楽

四重奏 第1番 短調 作品11から アダージョ/
ヴィヴァルディ:フルート協奏曲集 作品6から 第3番
二長調 ごしきひわ RV90(フルート:工藤重典)

【中学生のための芸術鑑賞会/ちょっとお昼にクラ シック4】

ブラームス:ハンガリー舞曲 第6番 変二長調/サ
ン・サーンス:動物の謝肉祭 より“白鳥”/サラ
サーテ:ツイゴイネルワイゼン 作品20/ラフマニノ
フ:14の歌曲より ヴォカリーズ 作品34の14/ショ
パン:ノクターン 第20番 嬰ハ短調/メンデルスゾー
ン:ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 作品49より 第
1楽章/[アンコール]ピアノソナ:アディオス・ノニーノ
【栗コダーカルテット】

静かに静かに/マヨネーズ第二番/鉄道ワルツ/仔
犬のテーマ(ベジエ)/マヨネーズ第三番/ドレミノ
オイカケッコ(NHK教育テレビ「ドレミノテレビ」よ
り)/勘違い(「キョロちゃん」より)/Red Fruit
Drunkers/A SUNNY DAY/クシコスポスト/[ワー
クショップ参加者との演奏曲]はじめてのたこあ
げ・ぼくらのソラシ・肩車のグラウンド/ピタゴラスイ
ッチ オープニング~TVのジョン(NHK教育テレビ
「ピタゴラスイッチ」より)/あめふりりんちゃん
(NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」より)/川
口君のおすすめトラッド 1・2/ペアーズシネマ/う
れしい知らせ/生きているだけで楽しい/[アンコー
ル]ラッパ吹きの休日・ワンダフルデイのテーマ
(NHK教育テレビ「Jam the HOUSNAIL」より)

4月17日には、好評「オルガン名曲ライブラリー」
、浅井美紀さんによる「フランス古典音楽(2)」が
予定されています。ダンドリュウ、ダカン、グリニ、ク
ーブランという前回のプログラムでしたが、今回はど
んな曲が登場するでしょうか?お楽しみに。

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】金曜日18:15頃~15分ほど(不定期登場) 水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

訃報:平 義久氏

作曲家の平 義久氏が3月13日、パリで逝去されました。67歳でした。平氏の名は、水戸の聴衆にとっては、とりわけ親しいものでしょう。水戸室内管弦楽団は氏に作品を委嘱し、2002年の第50回定期演奏会において、室内管弦楽のための『彩雲』が小澤征爾音楽顧問の指揮により世界初演されたからです。メシアンやジョリヴェ、武満 徹から影響を受けつつ、独自の響きの世界を追及した平氏の音楽は、日本よりむしろフランスで高く評価され、その逝去に際してはル・モンド紙に親友である名フルート奏者ピエール・イヴ・アルトールによる長大な追悼文が掲載されるほどでした。私たちは氏がその早すぎた晩年に『彩雲』というすばらしい作品を水戸のために遺して下さったことに感謝しつつ、ご冥福を心からお祈りします。

チケット・インフォメーション 4月16日(土)発売分

あひるの会合唱団 7/30(土)14:00開演
料金(全席自由):一般1,500円 高校生以下700円

4月17日(日)発売分

水戸室内管弦楽団第61回定期演奏会
6/18(土)18:30開演、6/19(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000
水戸室内管弦楽団第62回定期演奏会
7/21(木)18:30開演、7/22(金)18:30開演、7/23(土)18:30開演
料金(全席指定):S席¥13,000 A席¥11,000 B席¥8,000
第61回と第62回のセット券(限定300セット):S席¥16,000 A席¥13,500

発売初日に芸術館でお求めになれるチケットは、水戸室内管弦楽団第62回定期演奏会ではお1人様1回につき2枚までとさせていただきます。
水戸室内管弦楽団定期演奏会には、友の会の先行予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

映画『永遠の語らい』

4/9(土) ...自由席
クリスティーナ・ブランコ ポルトガル人の心、ファドを歌う
4/23(土) ...中央x、左右・裏
高山三智子 ピアノ・リサイタル
4/26(火) ...自由席
音楽物語 ぞうのババール
5/3(火・祝) ...自由席
川又明日香 ヴァイオリン・リサイタル
5/22(日) ...自由席
ミハイル・ブレトニョフ ピアノ・リサイタル
6/5(日) ...中央x、左右・裏

3/21(月・祝)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な4月のスケジュール

コンサートホールATM

クリスティーナ・ブランコ ポルトガル人の心、ファドを歌う
4/23(土)18:30開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
高山三智子 ピアノ・リサイタル
4/26(火)18:30開演 料金(全席自由):¥3,500

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
4/3(日)12:00/13:30 4/16(土)13:30/15:00
4/24(日)12:00/13:00
「オルガン名曲ライブラリー」 フランス古典音楽(2)
4/17(日)12:00/13:30 出演:浅井美紀

入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

クリスティーナ・ブランコ関連企画 映画『永遠の語らい』
4/9(土)15:00~17:00
料金(全席自由):¥1,000 4/23(土)のクリスティーナ・ブランコの演奏会
チケットと一緒に購入すると¥800
親子で楽しむ狂言講座 4/24(日)14:00開演
料金(全席指定):大人¥2,000 小人(中学生以下):¥1,000
対象:小学3年生以上
野村万作抄13『萩大名』『蘭罪人』 4/24(日)18:00開演
料金(全席指定):S席¥4,000 A席¥3,000 B席¥2,000

現代美術センター

「造形集団 海洋堂の軌跡」
4/9(土)~6/5(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な4月の演奏会

佐川文庫 TEL / 029(309)5020

佐川文庫サロンコンサート 吉野直子 ハープ・リサイタル
4/23(土)18:00開演

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

武蔵野音楽大学同窓会 茨城支部第33回定期演奏会
4/24(日)14:00開演
(問)武蔵野音楽大学同窓会 茨城支部 TEL / 029(221)3886

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

ディ・クライゼ ベートーヴェン ピアノソナタ 全32曲演奏会 第1回
4/16(土)18:30開演

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

音楽シリーズ2005 第15回ひたち出身者によるコンサート「音楽の園」
4/3(日)14:00開演
音楽シリーズ2005 「合唱コンサート2005~祈り~」
4/17(日)15:00開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

高橋竹童 津軽三味線 4/3(日)15:00開演
3/27(日)より変更となりました。
フルートの妖精 デュオ・シラクス 4/17(日)15:00開演

パバホール TEL / 029(852)5881

つくば学園都市オーケストラ第35回定期演奏会 4/17(日)14:00開演
倉本裕基 スプリング・コンサート ロマン・コレクション2005
4/28(木)19:00開演

結城市民文化センターアクロス TEL / 0296(33)2001

小山真 津軽三味線合奏「津軽塗り」 4/9(土)18:30開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2005年3月発行 第106号

編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵
矢澤孝樹(編集長)

【お知らせ】スタッフの小林聡子が、3月をもって退職いたしました。1年という短い間でしたが、皆様ありがとうございました。

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...開館15年、ATMはますます盛りだくさんです。